

第6回 漂えど、沈まず

IT生

漂えど、沈まずー。

この言葉は、文豪開高健が好んで使ったが、パリの紋章に刻まれている。セーヌ川が暴れ川で、中世のころから、町のスローガンになっていた。

茨城県常総市で、鬼怒川の決壊にもめげず、電信柱につかまっていた男性や、濁流にも持ちこたえた、さる住宅メーカーの家が話題になったが、別に「漂えど、沈まず」といった「覚悟」があったわけではあるまい。決壊後に避難情報を流したり、ハザードマップすらみたことないという有様では、「覚悟」があったかなかったかと問うまでもない。



洪水のあったミャンマーの風景。水があるところには恵みと災いが常在するというのは万国共通の真理である。

「覚悟」とは、その地に住もうリスクを熟知し、被災後も平然と日常の生活にもどる算段ができてこそ、である。近年、特に阪神大震災以降そうだが、災害があれば、すぐに募金が集められ、ボランティアがかけつける。本来、「みなさんご多用のおり、御手を煩わせはしません」といって丁重にお断りするのが、「覚悟」というものだろう。

多様な自然の変化と隣合わせの日本では、災害は、まれに起こる「非常時」などではない。日常生活の一部だと考えるのが妥当であろう。

だからこそ、日本では、四季折々の自然に題材をとった俳句や短歌が人々の生活のなかで詠まれていた、というのが寺田師の主張である。

と、うそぶきながら、ウイスキーの杯をひとり傾けるのであった。

アンクルトリス拝(平成27年9月)